

## 編集後記

2023年2月中旬、各論文の初校作業が集まるのを待ちながら、教職大学院代表者会議用の今年度の委員会活動報告（案）を書き終え、この原稿に取りかかっている。

この紀要の編集・発行作業は、教職大学院研究紀要編集委員会委員4名により行われている。もちろん、投稿者、教務支援課担当事務職員・印刷業者等、誰が欠けても発行できない。

この場をお借りして、感謝の意を表したい。

ところで、時代や状況が変われば、紀要発行環境も変わる。少人数で4キャンパスの教員・大学院生と学外の修了生等とのやりとりをするために、ITを含め活用できるものを可能な限り導入した（せざるを得なかった）。

今年度の編集・発行作業の変化を書き連ねてみる。

- A) 投稿エントリー方法としてグーグルフォームを活用した。
- B) 研究紀要編集委員会用のメールアドレスを大学の所定機関から発行してもらった。  
(これにより、従来は編集委員一人が対応する電子メールも、編集委員会に届くメールを委員全員で共有することができるようになった)
- C) 執筆要領を全面改訂した。(本誌130頁参照)
- D) 執筆者・印刷業者との原稿・校正のやりとりにクラウドサービスをフル活用した。
- E) 創刊から13号目にして初めて、特集を組まずに自由投稿論文のみで編集した。

A) は、ここ数年のコロナ禍による講義・会議のオンライン化により導入された某社が提供するシステムであり、活用方法も身についた（つけさせられた）。B) は、これ以降、恒常的に使い続けられ、委員が誰に交替しても受け継がれていく。修了生が投稿したくなったら、ぜひこの頁の末尾に記載した電子メールアドレス宛に、投稿したい旨の連絡や事前相談に活用してほしい。

E) は創刊当初から携わっている身としては感慨さえ覚える。ある程度の論文の本数を集めるために毎号特集テーマを考えてきた過去を振り返ると、自由投稿論文のみで12本という本数が2号続けて集まる（前号も同じ本数の自由投稿論文を掲載）時代がくるとは、創刊号を編集していたときは想像だにしていなかった。

しかしながら、時代は変わっても、なにより執筆者がいなければ紀要の存在価値はゼロである。本院修了生の皆さんには、ぜひ、意欲的な教育実践を積み重ね、いつの日か本紀要に論文を投稿してほしい。委員会一同、ドキドキわくわくしながらお待ちしている。

文責：紀要編集委員会委員長 前田輪音  
編集編集委員会委員 安井智恵 杉本任士 藤森宏明  
email address : kiyoutpdp@s.hokkyodai.ac.jp